

巻頭言

副会長 北九州市立総合療育センター 齋藤吉人

私事ですが、この度、28年間務めました療育センターを退職し、青森県弘前市に開講された弘前医療福祉大学に赴任することになりました。これに伴い、福岡県士会副会長も辞することになりました。これまでも職責をほとんど果たせずにおりましたが、県士会設立10周年記念の年半ばに去ることになり、何もお手伝いできず、浅田会長・佐藤副会長はじめ会員の皆様にお詫び申し上げます。

思えば、私が入職した昭和57年（1982年）当時は資格制度も無く、社会的認知も皆無でしたが、現在では県士会も会員数約500人となり、県下だけでも養成校が4校存在するという状況にまで発展して来ました。全国では有資格者が一万五千人を超えていると聞きます。

会が大きくなれば、多様な会員の声に応え、かつさまざまな社会的役割を果たす必要も多くなることと予見します。ところが、そうした会の発展の一方で、会長をはじめ県士会役員は全員がボランティアであり、言語聴覚士の社会的地位向上やそれを通じてコミュニケーション障害のある人々と家族を支援したいという情熱のみで支えられている存在です。

こうした状況で今後も福岡県士会が発展を続けるためには、若い世代の言語聴覚士の皆さんが県士会に入会し、会の実務に参加して下さることが鍵になると思います。もしこの一文を読んで下さる方の同僚に、そして近くの施設に未入会の方がおられましたら、是非、県士会への入会を呼びかけて下さい。

「裸の王様」にあるように、子ども達は素直な表現者です。入職した頃の頃は「おにいちゃん」と呼ばれ、30代で「おじさん」になり、40代後半から「じいちゃん」になりました。通園施設で「じいちゃん！みて！」と駆け寄ってくる子ども達の笑顔を見ながら、自分に求められる役割とは何か考え続けてきました。これからは皆さんの次の世代を育てる仕事をしたいと思います。遠い津軽の地からではありますが、福岡県士会の発展を祈念致します。長い間お世話になりました。ありがとうございました。



雪雲にかすむ津軽富士（若木山 2010. 2. 8 齋藤吉人撮影）